

# MOVERE

市民の手による移動サービス情報誌

モヴェーレ

NO.40  
2024  
OCT



## 特集 「組み合わせ」で解決できる!?

移動サービスの担い手不足・ニーズの多様化への対応 ..... 2

●ヒヤリハットからトホホまで・移動サービスあるある大事典(第7回) ..... 8

あり?なし?決まりのはざまのあんなこと、こんなこと

●東奔西走・荻ちゃんが行く〈東海大学健康マネジメント学科准教授 澤岡詩野さん〉 ..... 10

●シリーズ／被災地における移動支援活動の現場から ..... 12

被災者に無償で貸し出す車両にかかる車税問題

●"総合事業"に基づく移動支援が始まります ..... 14

〈三重県鈴鹿市〉一般介護予防事業「くらしまかせて支援事業」からサービスBに移行する補助

●全国移動ネット事務局だより ..... 16



SPECIAL ISSUE

# 「組み合わせ」で解決できる!?

## 移動サービスの担い手不足・ニーズの多様化への対応

担い手不足、高齢化…移動サービスが直面している課題は慢性的で、なかなか解決の糸口が見つかりません。さらに利用者も高齢化・重度化していて、身体介助や認知症への対応など、運転ボランティアの方にはハードルが高い内容も増えてきています。また地域によっては日本語のコミュニケーションが難しい外国人の利用者がいるなど、移動が必要な方のニーズも多様化してきています。今回の特集では、担い手不足やニーズの多様化に対して、異なるサービスや専門的な知識・技術を持った方、移動サービスや生活支援が及ぼす人や地域への効果など、あらゆるものを「移動サービス×○○」という感じで組み合わせることで解決していく。そういういた未来像を、活動団体のインタビューをもとに考察していきたいと思います。

### 1 車でつながる担い手コミュニティ レモンキャブ

運送主体：武蔵野市

委託先：社会福祉法人 武蔵野市民社会福祉協議会



武蔵野市高齢者支援課の佐々木佑太さんと  
武蔵野市民社協の横山美江さん

#### 多世代運営の福祉有償運送

事業開始から25年を迎える「レモンキャブ」は、武蔵野市が福祉有償運送の形態で運営している移送サービス事業です。9台の車両で年間約16,000件(2023年度)という全国的にもトップクラスの運行実績を誇っています。しかも運行協力員が約40名在籍していて、運行管理者※、運行協力員の年齢層は35~75歳と幅広く、多世代運営となっているのも特徴です。

※ 「運行管理者」…レモンキャブで使用している呼称で、国家資格ではありません。

#### 1台ごとに運行管理者と運行協力員

レモンキャブは車両ごとに予約専用の携帯電話が1台用意されていて、担当の運行管理者がコーディネートを行います。運行協力員も担当車両が決まっています。車を軸として運行管理者が中心になって運営されているため、号車ごとにコミュニティができるています。合同研修や合同の飲み会などもあり、号車グループ間の交流もあるようです。



地域で大活躍のレモンキャブ

#### ママ友が中心となって活動

レモンキャブ7号車は運行管理者をお父さんから引き継いだ娘さんが担当しています。お父さんの時代から運行協力員をしているベテランの方だけでなく、40代のママ友つながりの方も多く、年間1,700件の依頼をこなしています。小中学生のお子さんを持つママ友同士、和気あいあいと活動しています。

## 現役世代ドライバーも活躍

レモンキャブでは現役世代の運行協力員も活躍しています。ある方はライターで、レモンキャブのしくみに興味を持って参加されたそうです。担当の6号車まで自転車で向かい、おおむね週2回、運行協力員として活動しています。利用者との会話を楽しんでいて、創作活動のヒントにもなっているとのこと。他にも運転が好きなフルタイム勤務の50代会社員の方は、退職前の地域活動として、現在は土曜日のみの運行を担当しています。

## 親子二代で2台を担当

5号車と8号車はお米屋さんの親子が運行管理者をしています。息子さんは現在35歳でレモンキャブ最年少です。もともとレモンキャブはお米屋さんなどの発案で始まった事業で、お父さんが熱心に活動している姿を見て、二代目の息子さんも始められたそうです。

### 横山さんよりひと言

レモンキャブは運行管理者の皆様方の熱意と温かさに支えられて、もうすぐ25年目を迎えます。今後の課題としては、ここ5年以内に75歳で卒業となる運行管理者の世代交代。ここまで運行協力員が集まっているのは、運行管理者のみなさんが熱心に地域の人を誘ってくださっているからです。少しずつ若い方に参加いただき、世代交代と並行して、予約の受付方法も見直していくかと思います。

### 〈レモンキャブ概要〉

基本情報
「誰もが気軽に外出できるまち」を目指してスタートした、武蔵野市(健康福祉部高齢者支援課)が実施主体の福祉有償運送。武蔵野市民社会福祉協議会が事業運営を受託。
移動サービス
■福祉有償運送(事業開始 2000年10月~) ■車両台数 9台、利用会員は約900名

## 2 支援を「支縁」にするサポートー成瀬お助けたい



左から高木千賀子さん・玉木徹代表・黒田雅子さん

## 町田市成瀬地区の生活支援ボランティア

2019年から高齢者・障がい者などへの日常生活支援サービスを始めた「成瀬お助けたい」は、2024年8月現在、53名の扱い手(サポートーズ)が活躍している団体です。2021年に車による支援サービス(移動支援)を1名で開始、現在は7名のサポートーズが、自家用車を使って運転ボランティアを担当しています。利用料金は30分500円で、草抜きなどの庭仕事から病院の付き添い、電球の交換など、さまざまなお困りごとに対応しています。扱い手の年齢層は40代の主婦から80代の高齢者まで幅広く、子育て世代のママさんも参加しています。

## 時間に制約されずに参加できる

「パート勤務のようにシフトに縛られず、時間に余裕がある時に活動できるのがいい。自分ができないことは無理をせず断る。それが活動を続けるコツでもあるんです」と話すのは、運転ボランティアの黒田さん。自分の趣味や家庭の用事などとも調整しながら、無理のない範囲で活動しているそうです。また、受け取るお金だけではなく、利用者さんとのお喋りや「ありがとう」という感謝の気持ちがやりがいにつながっている、と話してくれました。

## 成瀬はとてもよい地域だと実感

成瀬お助けたいの活動が地域の見守り、助け合いのきっかけになっていると話すのは子育てママの高木さん。お子さんが「(利用者の)○○のおばちゃん

にもらったよ」とお菓子を持ってくることもあって、活動を通じて地域のみなさんに見守られているんだな、と感じているそうです。高木さんの言葉から、成瀬がとても良い地域だということが伝わってきます。



年1回開催される講習会

### 学生ソポーターズの募集活動も実施

成瀬お助けたいは学生の担い手募集にも力を入れています。町田市内の2つの大学にチラシを設置して、学生ソポーターズを募集しています。登録した学生も数名いたのですが、活動の継続が難しく、長続きしません。また、多くの学生が卒業後に他の地域に引っ越してしまうため、長期的な担い手に育たないという点も課題です。こういった課題があるものの、代表の玉木さんは「若い方にも参加をしてもらいたいので、大学生へのアプローチは継続していく」と話します。

### 「助ける側」から「助けられる側」へ

最近はソポーターズからの依頼もあって、ソポーターズの自宅の草抜きやパソコンの操作など、助ける側と助けられる側の両方になることもあるそうです。高木さんは「ソポーターズでもお助けたいを利用できること、知り合いを活動に誘いやさしい」と話していて、担い手の募集にも効果が期待できます。成瀬お助けたいは、「支援」が「支縁」になる活動が実践できている団体なのです。



#### 玉木代表よりひと言

ここ数年、町田市では生活支援団体やサロンが自発的にいくつか立ち上がっており、互助の意識が高まっています。成瀬お助けたいもその一つです。移動

支援の需要は年々大きくなっているので、需要に応えられるよう担当ソポーターズを増やしていきたいと思っています。利用者と担い手の募集は、年に2回、ソポーターズが地域各戸へのポスティングを行っています。自治会加入率が28%の成瀬中央地区において、直接配布は効果的です。黒田さん、高木さんもポスティングのチラシがきっかけで活動に参加してくれました。今後も情報が届きにくい人へ支援の手が届くよう活動していきたいと思います。

### 〈成瀬お助けたい概要〉

基本情報
成瀬地域住民の有志グループが日常生活の困りごとをサポートする有償ボランティアとして発足。草抜きなどの庭仕事から家事支援など幅広く活動している。
移動サービス
■許可・登録不要の運送（2021年7月～） ■担当ソポーターズ7名、活動件数382件（2023年度実績）

## 3 災害支援から平時の支援へ広げる たすけあいセンターJUNTOS(ジュントス)

運送主体：認定NPO法人茨城NPOセンター・コモンズ



倉持京美さん・横田能洋代表理事

### 災害時に在留外国人の移動を支援

2015年の関東・東北豪雨災害をきっかけに立ち上がった「たすけあいセンターJUNTOS」（以下、JUNTOS）は、在留外国人が多く暮らす茨城県常総市にあります。当時、水害で車が流された外国人を含む

被災者を対象に、避難所から被災した家の片付けや通院、子どもの通学などの移動をサポートしていました。JUNTOSがある森下町・橋本町は日系ブラジル人が多い地区です。運営母体の茨城NPOセンター・コモンズが在留外国人の支援活動を行っていたこともあり、ポルトガル語や英語を話せる職員が相談に乗ったり、通訳をしたりして、言葉の問題をクリアしました。

## 2024年に福祉有償運送へ移行

豪雨災害後は、移動支援の利用対象者が被災者から高齢者、障がい者に変わり、介助が必要な方も多くなってきました。2024年4月より許可・登録不要の運送から福祉有償運送へ移行し、利用料金も会費制から乗車ごとの料金設定に変わりました。ここで問題となったのが、福祉有償運送の利用対象外となってしまった、外国籍の子どもたちの送迎です。福祉有償運送と許可・登録不要の運送の並行実施を検討するとともに、運転ボランティアの確保が必要となっています。

## 認定運転者講習の受講がハードルに

「とにかく担い手が不足しているなかで、福祉有償運送の実施に必要な認定運転者講習(2日間)の受講がハードルを高くしている」と、倉持さんは話します。現在、運転ボランティアは4名で、JUNTOSの職員2名がコーディネートを担当していますが、対応できないときもあるそうです。運転ボランティアに興味があるても、受講機会が少ないと加え、時間的に2日間の講習では受講が難しいという方も多いようです。

## 在留外国人・大学生を担い手に

自営業で比較的時間に余裕のある在留外国人もいるため、この方が担い手になれば、言葉と移動の問題を両方解決できます。在留外国人は日本語のテキスト、講義を理解することが難しいため、翻訳など何らかの対策を取らなければと、横田さんは考えています。地元の大学生の力にも期待していて、取材

中に「学生グループがカーシェアで車両を所有して、移動支援とプライベートの両方で使ってもらう」というアイディアも出てきました。



現在は4台体制で運行

## 災害時の移動支援から平時の支援へ

横田さんは、災害をキーワードに地域の移動支援へつなげていきたいと話します。そのきっかけは、常総市から災害時要配慮者の個別避難計画を作成する業務を受託したことでした。豪雨で鬼怒川が氾濫すれば、再び水害にあう確率が極めて高い森下・橋本地域において、高齢者・障がい者の避難行動支援は重要です。JUNTOSは地域の民生委員と連携して要配慮者宅を訪問し、災害時の避難場所や必要な支援について確認を行っています。「日常の移動支援は負担が大きいと感じる方も、災害時にこの人の手助けをして欲しい、という依頼に応えてくれるのではないか」と話す横田さん。定期的な避難訓練をしてみたら「月1回程度なら買い物に連れて行ってもいいかな」とか「時間がある時は通院の送迎をしてあげようか」という平時の支援につながっていくかもしれない、と構想を膨らませています。



## 横田代表理事よりひと言

2015年の豪雨災害後、浸水した場所へ当時のことを見知らぬ在留外国人が家を建てて居住しています。彼らに災害時の対策を伝えていきながら、外国人の子どもの送迎など、移動支援の担い手となってもらえるよう働きかけていきたいです。また、移動支援の利用者、担い手と地域住民が交流を深めることで、移動支援を身近に感じ、「私にも何かできるかも」と活動に参加してくれる担い手を探せたらと思っています。

## 〈たすけあいセンターJUNTOS(ジュントス)概要〉

基本情報
茨城NPOセンター・コモンズの常総事務所として外国人児童生徒の学習支援行う。関東・東北豪雨災害を機に外国人住民を中心とした被災者支援活動を開始。
移動サービス
■許可・登録不要の運送（2015年9月～） →福祉有償運送（事業開始2024年4月～） ■車両台数4台、活動件数1,351件・利用登録者数37名（いずれも2023年度実績）

しました。御用聞きが多くのメディアで取り上げられ、事業の評価が高まり、一部の大学では御用聞きの活動参加で単位がもらえるまでになりました。大学生のみなさんは活動を通じて「ありがとう」のシャワーを浴びて、互助から生まれる感動を体験しています。



御用聞きイベントでの集合写真

## 4 圧倒的な社会経験を提供する 株式会社御用聞き



古市盛久代表取締役

### 15年かけて作り上げた成長戦略

大学生の担い手が中心となって、地域のちょっと困ったことを解決する「100円家事代行」「たすかるサービス」を展開するのは、「株式会社御用聞き」です。「会話で世の中を豊かにする」をビジョンに掲げて活動しています。代表取締役の古市さんは、有償互助サービスが経済合理性を持ち、成長戦略を描けるビジネスモデルになることを15年かけて実証してきました。利用者・担い手の両方をユーザーと捉え、利益追求型のサービスではない、お互いがたすけあう世界観を大切にしています。

### 担い手に大学生が集まる理由

「福祉の現場には若者が少ない。だったら学生をモデルに担い手組織を作ってみよう」と思った古市さんは、学生が自信を持てる将来を作れるように、圧倒的な社会経験を提供する社会教育プログラムを作成

### できないことは一緒に対応を考える

移動サービスについてニーズはあるものの、法令上の問題やタクシーなどの公共交通機関など、複数のプレイヤーがいるため、現時点ではそこに手を広げることはないそうです。介護タクシーの予約を手伝ったり、一緒に公共交通機関を利用して外出先まで付き添ったりはしています。移動に限らず専門的なサービスや許可事業、自分たちで対応できない依頼内容については、一緒にサービスを探したり、事業者を紹介したりすることにしています。また、他社のサービスを使った方が安い場合などは、利用者の立場に立って他社を紹介しているのも御用聞きの特徴です。

### 御用聞きは多世代向けの社会教育プログラム

古市さんは、担い手に長く活動してもらうことよりも、自分らしさを見つけて自信をもって活動を卒業してもらうことを望んでいます。対価としてお金をもらうサービス業ではなく、あくまでも有償互助であることにはこだわり、利用者も担い手もお互い様の関係であることを理解して、お互いが相手よりもっと先にお礼を言いたくなる関係づくりを大切にしています。

### 困っている人がいて大変…では人は集まらない

最近は移動サービスの団体から担い手不足解消の相談を受けることもある古市さん。「移動に困っ

ている人がいるけど担い手が足りなくて大変」と訴えかける悲壮感だけでは担い手は集まらない、と言います。どんな思いでこの活動を始めたのか、どんな特長を持った団体なのか、活動を通じて担い手にどんな感動を与え、何を提供できるのか。それをいかにPRできるかがポイントになる、と自身の経験をもとに担い手募集のヒントを話してくれました。

### 古市代表よりひと言

現在、大学生をモデルにした担い手グループから、多世代化に向けてテストを行っています。将来的に80代の高齢者でも社会参加ができるサービスインフラを作っていきたいと思っています。また、コロナでお休みしていた担い手同士の交流も再開し、全国

各地域の担い手交流を計画しているところです。以下の課題としては、認知症の利用者への対応があり、ケアマネジャーなど専門職のみなさんと連携しながら解決していきたいと考えています。

### 〈株式会社御用聞き概要〉

基本情報
福祉、商業、行政など様々な分野と生活者を繋ぐハブとなりながら、地域のちょっとした困りごとを解決する企業。東京（本店）と愛知、大阪、室蘭、九州でサービスを展開している。活動を担うスタッフの約9割が大学生。
移動サービス
■該当なし（付き添いは5分100円～30分2,000円の各種サービスで実績あり） ■登録ボランティア約800名（2024年現在・全国）

## これからの中動サービスを支える「組み合わせ」を考える

4つの団体から、担い手不足、多様化するニーズに対応する組み合わせのヒントをたくさんいただきました。教わったことをもとに、活動のポイントになる「移動サービス×○○」を考察してみました。活動内容や地域の事情によって当てはまらないものもあるかと思いますが、ぜひ参考にしていただき、団体の活動にマッチした「組み合わせ」を見つけてみてください。

### ト・つながり

### 目的・効果

#### × 店番・在宅ワーク

- ・時間に融通が利く人
- ・コーディネーターの負担を分散

#### × 現役世代・副業

- ・個人事業主、副業OKの企業
- ・退職後の地域デビューに備えて

#### × 見守り

- ・地域見守り活動でニーズ把握
- ・見守りの一環で担い手に

#### × 災害支援

- ・被災地での移動支援
- ・避難訓練から日常の支援へ

#### × 大学生

- ・日頃人を乗せて運転している人
- ・ボランティア活動で単位取得できる大学も

#### × ママ友・パパ友

- ・子どものスポーツチームや習い事つながり
- ・ライフステージに応じて参加

#### × 多国籍・多言語

- ・外国籍の人たちとの共生
- ・地域コミュニティ参加で暮らしありやすくなる

#### × 社会参加・自立支援

- ・就労支援、引きこもり支援など
- ・プログラム終了後も継続参加

### ツール・手法

### 私たちも頭を切り替える必要がある

#### × ポスティング

- ・情報が届きにくい人にリーチ
- ・利用者と担い手を両方発掘

#### × システム

- ・アプリ等でマッチング
- ・連絡調整をスムーズに

#### × カーシェアリング

- ・学生や社会人グループで
- ・移動サービスに使わないときは個人利用

#### × 分業・分担

- ・行きと帰り、付き添いが別の人
- ・時間効率アップ

事例で紹介した組み合わせは、ごく一部にすぎません。担い手不足や多様化する利用ニーズに対応するためには、きっと新しい取組が必要になります。「手いっぱい新しいことはできない」と諦めて動き出さなければ、担い手は見つかりません。

一番大切なのは、課題解決に向けて私たちが新しい視点を持ち、自らが変わっていく姿勢です。見えてきた新たな課題に合わせて新しい取組を始めれば、組み合わせで乗り切る未来像は、きっと無限にあるはずです。



## 【第7回】

### あり？なし？決まりのはざまのあんなこと、こんなこと

あのう……断ってしまったんです。今日Mさん の運行で内科に行ったとき、Mさんのお友だちのQ さんと待合室で会ったんです。Mさんは、「Aさん、 お外も暑いし、Qさんも乗せて差し上げてもいい かしら？」とたずねるのですが、福祉有償運送は 登録した人が事前に申し込んだ内容以外は、 対応できない決まりですよね。事情を説明して お断りしましたが、MさんもQさんもとってもがっ かりしていて、心が痛みました。

ところが、です。事務所に戻って、コーディネーターに報告をしていると、運行を終えた乙さんが 帰ってきました。

「えっ、断っちゃったの？ みんな付き添いの人で すと言つて乗せちゃえばよかったのに。俺なんて、 Jさんをお通夜に連れて行った帰り、親戚7人 みんなハイエースに乗せてやつたよ。どうせみんな 近くに住んでいるんだし、高齢者が暗い中、黒い のを着てとぼとぼ帰るのも心配だしさ」

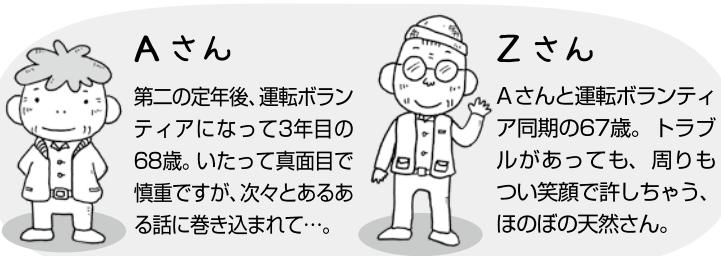
「えーっ！」

驚きのあまり、コーディネーターと私は同時に 立ち上りましたが、乙さんはどこ吹く風。

でも、乙さんが言うとおり、高齢者が困っているの だから助けてあげてもよかったのでしょうか。気になって気になって、夜も眠れません。

(Aさん・68歳)

あらあら、Aさん、また眠れなくなっちゃったんですね。この様子では、コーディネーターも眠れぬ夜をすごしていることでしょう。たしかに、法律には「付添の人数は1人のみ」という決まりごとはない から、7人みんな付添です！と言いつ切れないこともないのですが……。



きまりごとのはざま、判断に悩むこと がありますよね。こんなときは、頼りに なるベテランコーディネーターに意見を 聞いてみましょう。みなさん、あとから 聞いてギョッとしたイレギュラーな対応、 経験したことありますか？

(イラスト：坂板モツto毬栗堂)



13

ありますよ。ご主人の老人ホーム入所の運行で、帰りは福祉有償運送のステッカーをはがして無償に切り替え、奥さんを自宅まで送ってきたと、報告がありました。まあ、規則は守っているわけだし、まったくのボランティアになってしましましたが、疲れているであろう高齢者を置いてくるわけにはいきませんよね。



23

Aさんのケース、「病院の待合室あるある」ですよね。ウチの運転者、乗せてと言ったお友だちに、その場でサービスの会員登録してもらったという猛者がいます。運行が終わって戻ってきて、お友だち分の登録用紙を渡されたときはびっくりしましたが、サービスが届くようになった人がいることは、喜ばしいことかな、と。



33

夜の運行は、コーディネーターに連絡が取れないから、運転者の現場判断になってしまうんですよね。Zさんのケース、コーディネーターの立場だとひっくり返るほど驚くけど、Zさんの立場だと私も同じことをしたかも、と、つい思ってしまいます。



43

以前、ちょっとコワモテの利用者さんに、運転者が「こっちが近道だから」と、どうみても他人の敷地を横切るように言われ、おっかなびっくり指示に従った、ということがありました。福祉有償運送のルール以前のモラルの問題ですが、「ウチの庭みたいなところだから、いいんだよ」と言われちゃったら、ねえ。

なるほど、コーディネーターのみなさん、たくさんの経験をしているんですね。もともと市民同士の助け合いから始まった移動サービス、法律に基づいているから守らなくてはいけないこともありますが、解釈によっては決まりに引っかかることがあります。



53

「あの人との初デートの思い出の場所なの」と、9歳近い利用者の女性に言われ、隣町の桜の名所までぐるりと遠回りした運転者がいました。予定より6キロくらいオーバーしていましたが、実績に基づいて利用料を請求することにしました。

決まりどおりにとらわれすぎて、人として大切にしなくてはならないことを見落としてしまっては、本末転倒な気もします。できる範囲で利用者の望みをかなえることができるのも、福祉有償運送の醍醐味だと思っています。





## 居場所はその場所でどんな居方をするかが大切

東海大学健康マネジメント学科准教授 / 澤岡 詩野さん

今回は新しい住まい方として注目を集める“萩窪家族レジデンス”に、老年社会学者として関わってこられた澤岡詩野さんに、プライベートも含め今に至るストーリーを伺いました。



— 建築を専攻されたと伺いましたが、今は老年社会学者。

それぞれ志したきっかけは？ —

小さい頃から、人に興味があるのに仲良しごっこにはついていけない子でした。一方で、人の暮らしに関わる何かをしたいと思い、北里柴三郎と野口英世の伝記を幼い頃に読んだのがきっかけで、お医者さんになりたいと考えるようになりました。医学部を受験しましたが、勉強が嫌いで不合格。親に「一浪までよ」と通告されました。でも私、プロ野球の横浜の大ファンで、予備校のすぐそばに横浜スタジアムがあったから、浪人時代は開門直後から通い詰めていました（笑）。

で、医学部は諦め、そういえば親が都市計画や建築をやりたかったと言っていたなと思い、建築系大学にどうにか合格しました。美しい建築には全く興味が持てず。

私は何がしたいの？と思っていた矢先、大好きな祖父が倒れ、片麻痺の後遺症が…。ええかっこいで、趣味の社交ダンスでは颯爽

と女性をリードしていたのに、ダンスホールが助けられるだけの場所に変わってしまったと感じたのでしょう。以降、祖父はダンスに誘われても出かけなくなりました。

— それは悲しいですね。 —

初めて「祖父がどう生きたいか」ということに目がいきました。そこをちゃんと分からないと、環境作りは違ってしまうんじゃないかなと。それで、大学院では老年社会学に進みました。私がやりたいのは居場所の研究。居場所の「い」はどう「居」たいかの「い」なんだと気づいたんです。祖父が外に出なくなったのは、今までとは違う居方になり、旅行やサークル活動がただの場所になっちゃったからだと思います。

— その後のおじいさまは？ —

自宅がある千葉から横浜の私の家に、年に一度くらいタクシーで片道2万円かけてやって来ようになりました。杖がないと歩行困

難な祖父、一度来ると簡単に外出できないし、知り合いもいないし、心臓に不安を抱えているのに遠出してくるなんて、死を覚悟してるのは？と思うくらいでした。

そんな祖父を見て気付いたことがあります。千葉の自宅では髭も剃らずパジャマなのに、横浜に来る時は、綺麗に髭を剃り、ポマードつけて、真夏でも三揃えなんです。祖父は、大学の先生だった私の父に色々意見を聞かれるのが嬉しかったようです。父は祖父を尊敬していて、祖父のことを「お義父さん」ではなく名前で呼んでいました。

祖父は歳を重ねて体が不自由になっても、知識、お金、強い意志を持っていたから、タクシー代をかけてウチに来て自分を高揚させて満足させることができたのだと思います。でも、殆どの方が諦めちゃう。皆が祖父みたいな生き方を、無理しすぎず、自分で選べるように、まずは選択肢を増やせるような社会になったらいいなと思っています。

## — 移動のニーズをどのようにお感じでしょうか？ —

外出支援は、外に出ることを支援することも、行った先での居方も大切だと感じています。祖父の場合、お馴染みのタクシードライバーさんに、こう居たいという居場所への移動を安心して任せられる手段があったから、アグレッシブに生きられた。また、私の父が祖父に敬意を払ったからこそ、ウチは祖父が人として威厳を保てる居場所になった。一人一人に合った移動と居場所とを確保できれば、生き方が変わるものいるのではないかでしょうか。

## — “荻窪家族レジデンス”を取材した澤岡さんの著書『豊かに歳を重ねるための「百人力」の見つけ方』について伺いたいのですが？ —

大家さんの瑠璃川正子さんは、杉並区の地域大学で15年ほど前に知り合いました。

歳の重ね方に対する考え方は人それぞれです。子どもから大人、ペットまで、自分にとってユルヤカな交流の中で、つながったたくさんの人の力をおたがいに感じながら生きることを、瑠璃川さんは

「百人力」と名づけました。活動が広がると初めて来る人にも伝わる言葉が必要になります。私たちが目指すものを何度も話し合ううちに「百人力」が標語になっていきました。それを体現する居場所であり、住まいが“荻窪家族レジデンス”という賃貸住宅です。行政が作ったら理想的な場にするのは難しい、との思いで始めました。地域の人が集うサロンスペースもあるんですよ。「自分も何かやりたいことがある、その場に集まる方のお手伝いもする。そういう「お互いさま」の人を歓迎する場です。

素敵な提案があれば、瑠璃川さんが紹介します。それで「百人力」を得て「出来ちゃった」となるのが楽しいんです。

— まさに澤岡さんがやりたかった居場所ですね。本の中で「ちょっとした一歩で暮らし方が変わる」とありますが、ご自身の将来に向けての一歩は？ —

建築？社会学？ってフラフラして学んだ私の経験上（笑）、それでもいいんだよ、と学生たちには伝えたいです。

コロナ禍で、居たいはずの我が家が「居なくてはいけない場所」

になった時、家族がギクシャクして。外に出ても、近所に挨拶する人も、行く先もなく、これはやばいと思いました。そこで、ウチの前に本棚を置いて図書館を始めました。「挨拶できる詩野ちゃん」になるための種まきです。すると「本のおばちゃんだー！」って子どもたちに声をかけられ、近所のおばあちゃんが孫の読まなくなった本を玄関に置いていってくれるようになりました。私は今年で50歳、娘は9歳になるんですが、将来的には本の横にベンチを置いて、ポケットに飴ちゃん、アイスボックスにビールとワンカップを入れて「おいでー、座りなー」って通る人みんなに声かけるおばあちゃんになるの（笑）。若い頃は、小料理屋をやりたかったけど、料理は得意じゃないし。85歳「スナック詩野」開店。加齢で外出がキツくなったら、自分が動かなくてもいい所を居場所にして、他人に集まつてもらうのもアリかと思います。

より豊かに生きるためにヒントが満載

▼  
豊かに歳を重ねるための  
「百人力」の見つけ方

澤岡 詩野 著

出版：カナリアコミュニケーションズ



澤岡先生(右)が全国移動ネットの事務所に来てくださいり、野球談義にも花が咲きました。



お話が大変興味深くて、あつという間の取材でした。「スナック詩

野」是非常連客になりたいけど、開店する頃は小生、鬼籍に入ってるでしょうね。開店早まりませんか（笑）。

## 寄付車を使った被災地支援の壁…支援の数だけ嵩む「自動車税」

今年の元日に発生した能登半島地震では、約16万棟を超える建築物（住家・非住家）の被害が確認<sup>※</sup>されています。車庫や路上にある自動車も津波や倒壊、土砂による被害を受け、被災者は移動手段を失いました。そんな被災地で車が必要な方へ無償貸出しを行っている、一般社団法人日本カーシェアリング協会の代表理事、吉澤 武彦さんと、その活動を支援しているNPO法人セイエンの代表理事、関口 宏聰さんに支援活動の壁となっている「自動車税」の問題についてお話を伺いました。

※2024年8月21日、消防庁速報より

### 所有すると課税される「自動車税」



車が被災すると、大切な移動の足を失くしてしまう

一なぜ自動車税が支援活動の壁になるのでしょうか？

**吉澤** 日本カーシェアリング協会は、東日本大震災をきっかけに、寄付で集めた車を活用して、災害時に被災者や支援団体へ無償で車を貸し出す「モビリティ・レジリエンス<sup>※</sup>」活動を行っています。寄付車両は私たちの所有物となるので、毎年「自動車税」を支払う義務が発生します。課税額がそのまま協会の経費負担になるのです。

※レジリエンス…困難を乗り越え回復する力

### 能登半島地震の支援車に支払った 自動車税は640万円

一実際に自動車税をどのくらい支払っているのでしょうか？

**吉澤** 能登半島地震では、課税基準日に普通車144台と軽自動車263台、計407台を保有していて、自動車税は約640万円でした。能登以外にも石巻市をはじめ全国5ヶ所で管理している車両を含めると、協会全体で年間約1千万円の自動車税を納めています。南海トラフ地震や首都直下地震が発生した場合、能登半島地震の10～15倍の車両が必要にな

ると想定しているので、自動車税の負担も最大15倍になる見込みです。これは活動の根幹を揺るがす問題で、寄付車で支援をしたくても自動車税が支払えなくて支援できない、という状況にもなりかねません。そこでセイエンに協力してもらい、自動車税の減免措置を国や行政に訴えかけています。

### 自動車税減免対象の車両もあるが…

一具体的にどのような訴えかけをしているのでしょうか？

**吉澤** 自治体によっては全日本交通安全協会が所有する車両や消防車・救急車など、一部の車両は自動車税が減免となっています。同様の対応をしてもらえるように、活動の趣旨と自動車税負担の大きさを訴えています。

**関口** 自動車税の納税先は、普通自動車が都道府県、軽自動車が市町村と別れています。意義ある活動をされている団体に対して全国的に自動車税が減免されるよう、地方自治体や国会議員に訴えかけていますが、全自治体となると、とても時間がかかります。

**吉澤** 自治体と災害時における協定を締結する際、車の無償貸出し継続のために、自動車税の取り扱いについて検討してもらえるよう、全国の自治体に向けて私たちの活動実績をアピールしていくことが重要なポイントになると思っています。

### 有償貸出しであっても利益は出ていない

一無料の貸出し期間が終了すると車両はどうなるのでしょうか？

**吉澤** 車を被災した方の約9割が4～5ヶ月くらいで自身の車を購入するので、終了後は協会に戻って

来ます。その車両の維持管理費が必要になりますが、平時になると助成金などの金銭的援助がなくなってしまいます。戻ってきた車両は有償レンタカーとして貸出したり、被災者やNPO、生活困窮者などを対象にリースを行っていますが、いずれも低額のサービスなので、経費を考えると、利益はほとんど出ていません。

**関口** 寄付車の台数、貸出件数が増えていくほど、自動車税が重くのしかかってきています。こうした被災者支援活動を支えてくれるのが助成金なのですが、自動車税などの税金については助成の対象外というのが一般的です。第一に自動車税の減免、それが叶わないとしても、使途を制約しない助成金制度を設けて、被災地支援活動を維持できるようにしなければなりません。

### 必要なモビリティ確保のために

一日本カーシェアリング協会のように、車を使って被災地支援をしている非営利団体に対して、包括的な減税措置を求ることは難しいのでしょうか？

**関口** NPOで、ここまで台数（2024年6月現在・約650台）の車両を保有している団体がなかったため、問題が顕在化していなかったのだと思います。被災地での車両無料貸出だけでなく、被災地に無償で提供されるトレーラーハウスやトイレカー、

作業用の重機などを含む「モビリティ救援」の大枠として、自動車税の減免措置を受けられる制度を作っていくとともに、有償であっても低廉なものは目的・用途に応じて無償と同等に扱われるよう、吉澤さんと一緒に声をあげていきたいです。かけています。

**吉澤** いま私たちの団体が抱える課題は大きく4つあって（下図参照）、最も重要なのが自動車税負担の問題です。多くの方に知っていただき、来たるべき大規模災害に備えた支援の輪を広げていきたいと思っています。



吉澤 武彦（よしざわ たけひこ）

一般社団法人日本カーシェアリング協会代表理事。東日本大震災後、石巻で寄付車を使った被災地支援活動を開始。「寄付車を活用した支え合いの仕組み」を広げる活動を続けている。



関口 宏聰（せきぐち ひろあき）

NPO法人セイエン代表理事。NPO法改正や寄付税制拡充に向けた政策提言、フードバンク推進やケアラー支援、災害救助法改正等のアドボカシー活動を支援している。

### モビリティ・レジリエンス

- ・災害サポートレンタカー（無償貸出し）
- ・企業、団体との災害協定で迅速な支援提供

### コミュニティ・カーシェアリング

- ・地域コミュニティで寄付車を共同利用
- ・移動が必要な地域で導入

### ソーシャル・カーサポート

- ・ソーシャル・レンタカー
- ・ソーシャル・カーリース

災害時返却カーリース（災害時に車両返却）  
NPOカーリース  
生活お助けカーリース（生活困窮者向け）  
移住カーリース（移住者・地域おこし協力隊向け）

### おもな活動内容



日本カーシェアリング協会

### 寄付車を活用した支え合い



### 課題 1

車両の維持費負担が大きい

台数増=負担増  
持続化の危機!!

### 自動車税

維持・  
管理費

### 課題 2

実態が把握されていない

車両の被災状況を  
正確に把握する

### 課題 3

支援用の寄付車が不足

寄付税制の明確化

### 課題 4

車両の登録に  
時間がかかる

車庫証明の取得を  
迅速に対応

### 4つの課題



## “総合事業”に基づく移動支援が始まります

### 〈三重県鈴鹿市〉

## 一般介護予防事業「暮らしまかせて支援事業」からサービスBに移行する補助

三重県鈴鹿市は、三重県の北中部に位置し、製造業を中心に発展しているため県内では比較的若い人が多い市です。日常生活圏域は8つ、小学校区域単位の「地域づくり協議会」が28地区あり、この協議会ごとに、自治会長や民生委員などが中心となって地域に必要な活動を展開しています。生活支援コーディネーター（SC）は、第1層が1名、第2層が4名、いずれも市社会福祉協議会の職員です。SCは、協議会ごとのふれあい生きいきサロンの立ち上げや運営の支援、「暮らしまかせて支援事業」を活用した生活支援の取組の支援をしています。



【鈴鹿市人口】約20万人

【高齢化率】約26%

【面積】194.5km<sup>2</sup>

### ◆「暮らしまかせて支援事業」とは

この事業は、一般介護予防事業（地域介護予防活動支援事業）の補助事業です。地域で事業の立ち上げや実施がしやすくなることを優先としているため、活動内容は細かく定めていません。

### <暮らしまかせて支援事業の補助>

目的	1. 繼続的な通いの場の活動により、地域の元気高齢者の役割づくり、生きがいづくりの場を設け、QOL向上などの介護予防を進める。 2. 生活上のちょっとした困りごとを解決する互助の仕組みを支援することで、住み慣れた地域での日常生活の継続が可能な地域づくりを進める。
補助対象	【必須】通いの場の開設⇒交流の場、介護予防活動の場、地域課題に関する会議、人材育成などの勉強会を定期的に実施すること 【発展】日常生活の困り事（生活支援）⇒ごみ出し、電球交換、話し相手、庭木の剪定、除草、病院・買い物等への付き添いなど ◎その他要件：地域づくり協議会の事業として取り組むこと。地域リーダー（SC）の設置
補助額	①立ち上げ支援費⇒1年目のみ補助。20万円／年上限 ②運営支援費⇒3年間補助。1～2年目は20万円／年上限、3年目は10万円／年上限

この事業は、令和元年にある障がい児のご家族から相談が寄せられたことをきっかけに、地域とSCと行政が話し合いを重ね、地域の支え合い活動の事業として制度化しました。

市では当初、サービスBの活用を検討しましたが、初めから要支援者を対象に活動を行うことはハードルが高いため、一般介護予防事業の枠組みの中で補助の期限を設け、立ち上げ支援として「暮らしまかせて支援事業」を構築しました。

現在は28地区中13地区が活動を開始し、うち8地区で車を使った付添支援を行っています。

### ◆「訪問型・通所型サービスB」への移行

「暮らしまかせて支援事業」の補助が3年で終了すると、介護予防・生活支援サービス事業の訪問型・通所型サービスBに移行し、受け入れ体制を整えることで訪問型と通所型それぞれ毎年10万円ずつの補助を期限なく受けられます。

また、対象者は要支援者等ですが、対象者へのサービス提供に支障がない場合はその他の人も利用することができます。

## <訪問型サービスBの実施基準>

対象者	65歳以上のケアプランに基づく高齢者（要支援1、2、事業対象者）
補助対象	身体介護を伴わない生活支援サービスの実施体制を整えること ※外出時の付添・ごみ出しは必須メニュー。その他は地域によって異なる（掃除、洗濯、調理、買物、灯油の補給、話し相手、庭木の剪定・草刈り等）
実施体制	利用者の状況の変化によって支援内容の見直しが必要と認められた場合には、すみやかに担当ケアマネジャー等に連絡する。
補助額	10万円／年上限 ※年数の制限なし

付添支援とごみ出しを必須メニューとしたのは、「暮らしまかせて支援事業」で、この2つの支援依頼が多く、特に付添支援は地域包括支援センターやケアマネジャーなどからの要望もあったからです。令和6年7月末現在、3地区がサービスBに切り替わっています。

## <車での移動を伴う付き添い支援の実施状況>

\*令和5年度に活動実績のある7団体のみ記載

活動団体名	使用する車	有償	令和5年度実績
稻生助け愛ネット	・自家用車 ・地域づくり協議会所有車	年会費1,000円、付添30分300円ガソリン代相当。地域毎に設定	通院：274件 外出：44件 買物：26件
旭お助け隊	・自家用車	年会費1,000円、付添30分250円+実費ガソリン代相当（5キロ未満200円、10キロ未満500円、10キロ以上1000円）	通院：260件 外出：0件 買物：41件
ささえあいま庄野	・自家用車 ・介護事業所の運転手付き送迎バス	年会費1,000円、バス乗降支援100円（介護事業所運転手へ支払）付添30分300円+実費	通院：58件 外出：30件 買物：0件
天名生活支援ネットはごろも	・自家用車	年会費1,000円、付添30分300円+実費	通院：30件 外出：0件 買物：0件
ささえあいネット合川	・自家用車	年会費1,000円、付添30分300円+実費	通院：79件 外出：0件 買物：24件
ペガサスマキタ	・自家用車	年会費1,000円、付添30分300円+実費	通院：48件 外出：0件 買物：0件
なご微助っ人	・自家用車 ・地域づくり協議会所有車	年会費1,000円、付添30分300円+実費	通院：41件 外出：14件 買物：1件

### ◆長寿社会課と第1層SCからのコメント

車を伴う支援に抵抗を感じるという声は多いですが、第一層協議体会議や視察などを通じて必要性を伝えることで、付添支援未実施の地域の前向きな検討につながっています。

付添支援を実施している地域では、「免許返納後の病院付き添いは助かった」「立ち上ってくれた方々に感謝している」「この地域に住んで良かった」といった利用者の声や、「ありがとうと言ってもらえて嬉しい」「この活動をきっかけに地縁が復活してきた」といった支援者の声もよく聞きます。

一方、地域によっては「近隣に支援を受けていると知られることが恥ずかしい」といった声もあり、利用者数が伸びず、活動が軌道に乗らないといった問題や、支援者側の高齢化や後継者不足などの問題もあります。

地域の数だけ新たな課題が生まれてくるため、今後も事業の見直しや、新たな事業を展開していくかななければならないと考えています。



# 全国移動ネット事務局だより



## 会員のひろば



### 有志検討会が取手市に提言書提出

NPO法人 活きる 事務局長：宮脇 貞夫

茨城県取手市には、福祉有償運送を行っている団体が4団体あり、その一つが「NPO法人 活きる」です。障がい者支援の取組を中心につつ、福祉有償運送を通じて高齢者の支援も行っており、運行件数は最も多い時で年間1万件に上りました。

しかし、福祉有償運送の利用対象者以外にも、バス停や駅までが遠くて公共交通機関を利用できない高齢者が増加しています。福祉有償運送の利用者も増加の一途をたどっています。取手市には、団体の運営を補助する制度もありますが、「活きる」は運転ボランティアの高齢化と減少により、すべての依頼には応えられず、他の3団体もそれぞれの事情で提供量を増やすことは難しい状況です。

そこで、今年5月、もっとサービスや活動を増やしていくかなければ、移動が困難な人の増加に対応できないという思いから、有償運送の会長や自治会町会長、市議などに声を掛け、「新移動手段検討会」という会議を発足しました。6月末までに3回の会合を開き、乗合タクシーの検討、住民主導の無償運送、ボランティアの確保、デイサービスの空き車両活用など7つの提案をまとめて、市の福祉部長と都市整備部長に提案。都市整備部長からは、検討会で話し合っていただいたことに感謝するという言葉をもらい、福祉部長からはご提案は全て必要なことで関係部署は積極的に進めたいとの回答を得ることができました。改めて、都市整備部に提言書を出し、来年に策定される地域交通計画に盛り込むため、関係各課と協議されることになりました。計画策定と並行してできることは早く実現させるようお願いしていますが、福祉有償運送を継続してきた団体として、一つの節目になったと感じています。

#### <提言項目>

- 新たな移動手段を構築するために、活動しやすい環境を整備する

- 住民主導の移動支援を始めるための指導、情報提供をする
- 新たな移動手段の情報を地域に周知させる
- 車いす利用者の移動手段を確保する

### お便りコーナー

担当マネージャーより「モヴェーレ」を頂きました。スタジアムで、スマホで撮影した写真がお役に立てて光栄です。  
車いすの方々にもスポーツをもっともっと楽しんで欲しいです。そのためにもスタジアムや公共交通機関の整備が進んで欲しいですね！座席ももっと増やして欲しいですね。

大阪府だけでなく日本や世界レベルで考えて欲しい案件です。ありがとうございました。

(よしもと新喜劇 / タックルながい。さん)



(表紙の写真)

左/能登半島地震の惨状。日本カーシェアリング協会撮影  
(輪島市にて)

右/日常生活を支援する「成瀬お助けたい」のボランティア  
(町田市)

下/9台のレモンキャブが集合。なくてはならない存在として定着している(武藏野市)

**市民の手による移動サービス情報誌**

**「モヴェーレ MOVE RE」第40号**

2024年10月4日発行

定価● 550円 (本体500円+税/送料別)

発行人●中根 裕

編集・発行●特定非営利活動法人 全国移動サービスネットワーク

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 1-1-2 山崎ビル 204号

Tel : 03-3706-0626 Fax : 03-3706-0661

E-mail ● info@zenkoku-ido.net https://zenkoku-ido.net

制作●株式会社 アダプティブデザイン

#### ■「モヴェーレ MOVE RE」ネーミングの由来

移動サービスは「運送(transport)」するのではなく、外出のための「移動(movement)」を支援する活動です。「モヴェーレ(movere)」はラテン語で「動く」の意。このネーミングには、移動困難者を含めたすべての人々に移動権が保障されることを目指す全国移動ネットの強い想いが込められています。